

小学校の音楽教育の実態に関する調査研究（II）

— 山口県内の小学校教員を対象に —

野波 健彦・池上 敏

A Survey on the present State of Music Education at Elementary Schools(II)

— A Questionnaire Survey of Elementary School Teachers in Yamaguchi Prefecture —

by

Takehiko NONAMI, Satoshi Ikegami

[Abstract]

It is believed that the musical development of a child in a broad sense is closely related with heredity and environment in which he grew up; especially the musical environment at home in childhood plays the most significant role in developing the child's musical ability.¹ The teacher's attitude toward music or art in general has great influence on the musical development of children at elementary school, particularly in the music class. And also his interests in extra curricular music activities such as going to a concert, joining in a chorus and so on, is indirectly concerned with enhancing the children's attitudes toward music, especially in the affective domain.

We conducted a questionnaire survey of 810 elementary school teachers in Yamaguchi prefecture regarding the present state of music education at elementary schools in 1989 and made a report about the results of the analysis of the obtained data.² We found that two out of five teachers do not find much interest in teaching music. As long as we emphasize the affective aspect of music education, the present situation is deplorable and cannot be overlooked.

This is the second report about the remaining data that we did not analyse in our previous study. We further touch upon the teacher's involvement in music activities.

I はじめに

本調査研究は、「小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討と開発」のための資料を得るためのものである。われわれは、1989年山口県内の小学校教員 810名を対象として、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識について調査を行い、得られたデータの分析結果について報告した。² その報告では、先ず、前段で質問項目ごとに集計結果の数値をながめて若干の考察を加えた。次に、後段では、1) 教員の音楽の授業への関わり方の現状、2) 音楽の授業の教科と

しての位置付け、3) 音楽の授業の望ましい担当者像、4) 音楽経験と音楽の能力・音楽への関心との関連性、の各テーマについて幾分詳細に考察を行った。その結果、小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討と開発を進めていく上で、次の二点は考慮されるべきであると考えた。

- 小学校の教員は「音楽の授業の重要性」について認めてはいるが、音楽の授業では、音楽あるいは教科内容そのものの指導というより、音楽の授業の学級経営上での役割を強く意識している傾向があること。
- 小学校の低学年では、前述のような授業の傾向から学級担任が音楽の授業を担当するのが望ましいが、かなり高度な音楽的技能を要する中学年・高学年では音楽専科や音楽の得意な教員が担当するのが望ましい、と考えていること。

本稿は、前回の報告で分析考察し残したアンケートの調査内容、すなわち1) 質問項目における自由記述の部分、2) 四つの質問項目(大学時代に所属していた音楽関係のクラブ・サークル、教員の各ジャンルの音楽に対する好悪、芸術文化・体育等の行事・催し物への関わり、音楽を趣味にしている場合の音楽の種類)から、2)の内容について分析考察したものである。

一般に、広い意味での音楽的発達は遺伝とその子どもの育った環境とが複雑にからみあって進行することが知られている。特に、子ども時代の家庭の音楽環境がその子どもの音楽的能力の発達に最も重要な役割を演じると信じられている。¹ 小学校段階に入った子どもたちの音楽的発達は、特に音楽の授業で音楽や一般芸術に対する教師の態度に大きく影響を受けている。そして、コンサートに行くとか、コーラスに参加する等のような特別な音楽的活動に対する教師の興味・関心もまた、特に情意的な意味において音楽に対する子どもたちの態度の育成に間接的に関わっている。前回報告の分析結果の一つは、教師のうち5人に2人は音楽指導にあまり興味・関心をもっていないことを示している。その報告の中で触れたことがらであるが、季刊音楽教育研究(1974年第1号)の「教わる側の発言」と題する特集の子どもたちの発言に関わって、千成が述べている「音楽をいやいや教えない先生」、「音楽の力量が豊かな先生」³の養成の問題は今日なお重要な課題であることをこの調査結果は示していると言える。特に情意的な側面を大切に考えている学校音楽教育では、このような状況は決して好ましいものではなく無視できないものである。

本稿は、アンケートの調査結果に基づいて音楽環境のうち人的環境である教員の音楽に対する意識や音楽・文化一般との関わりについて分析考察したものである。

II 研究の目的

本調査研究の目的は、小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムを検討する第1段階として、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識を明らかにすることである。そのために、山口県内の小学校の教員に音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識に関する質問紙調査を行い、その結果について分析し考察を行う。本稿では、特に教員の音楽に対する意識や音楽・文

化一般との関わりについて分析し考察を加える。

III 研究の方法

本調査研究では、小学校における音楽教育の実態と音楽教育に対する教員の意識を明らかにするために、研究方法として質問紙による調査方法を選択した。

調査票の作成に当たっては、関連する先行研究⁴⁾を参考にしながら質問項目を検討し、一方現場の音楽出身の校長や教員並びに山口県教育委員会の音楽担当指導主事等にも調査全般に関して意見を求めた。最終的に調査票は、1. 小学校における音楽の授業に関することから、2. 小学校の教員の音楽経験に関することから、という大項目のもとに、それぞれ下位項目を設けたものになった。それは、末尾に添付した15項目の質問からなる調査票である。

調査対象としては、山口県内の教員（管理職、特殊学級担任・養護教諭を含む）を考えたが、その選定に当たっては、今回の調査が全面的に山口県小学校教育研究会（小教研）音楽部会の協力のもとに行われた関係で、県内を29地区に分けた小教研の地区割によった。従って、調査対象は、岩国、玖北、玖西、玖南、柳井、大島、熊毛、徳山、下松、光、新南陽、熊北、都濃、山口、防府、佐波、吉敷、美祢郡、阿東、宇部、小野田、美祢、厚狭、下関、豊浦、萩、長門、大津、阿西の山口県全域にわたる29地区の小学校並びに山口大学教育学部付属小学校2校の教員である。

調査票の配布は、1989年6月に行われた小教研音楽部会に出席の各地区の理事に依頼した。同年7月中旬までに県内29地区から、結果的には約120校810名の教員から回答が返送され、回収することができた。ただし、各地区の理事の判断の違いから調査票の配布された校数には各地区で差があり、1地区1校の地区から1地区10校の地区までであった。

IV 結果と考察

今回は、第一報では未集計であったいくつかの項目の集計結果を掲載すると共に、それに基づいての簡単な考察を行いたい。なお、質問内容の詳細については、最後に質問用紙を再録したのでそれを参照いただきたい。第一報で未集計であったのは以下の諸項目であった。

- 1) Q 3 「現在、音楽の授業を担当することについてどのような感じを持っているか」についての選択理由
- 2) Q 4 「過去において音楽の授業を担当した時どのような感じを持っていたか」についての選択理由
- 3) Q 7 「小学校音楽科の授業は誰が担当すべきか」についての選択理由

- 4) Q 9 b 「大学時代に大学の内外を問わず音楽関係のサークルに所属していた」回答者の音楽サークル等の種類
- 5) Q 1 2 音楽の各ジャンルに対しての個人的な好悪（各種）
- 6) Q 1 3 文化的行事、催し物等への参加の頻度
- 7) Q 1 4 イ音楽を趣味にしている人の音楽の種類、演奏している楽器等。
- 8) Q 1 5 小学校音楽科の授業をするに当たっての課題、悩み等（自由記述）。

今回はこのうち、「理由・自由記述による回答」を除く各項目、すなわち4)から7)までを取り上げる。前段では集計結果の数値を示し、簡単なコメントを加える。

Q 8からQ 1 1までは調査対象、すなわち小学校の学級担任・音楽専科の先生方の幼児期から大学卒業時までの音楽的経験について尋ねている。これはどのような音楽体験を持って教壇に立つことになったのか、その概要を把握したかったからである。Q 9では大学在学中の音楽体験を学部での授業受講状況、大学内外の音楽活動への参加状況から把握しようとしたものである。

Q 9、大学時代の音楽との関わりについてうかがいます。

a 該当する所はすべて○印をつけて下さい。

イ 音楽科教材研究

ロ 小学校課程の音楽専門

ハ 中学校音楽科の教員免許を取得している。

ニ 大学の内外を問わず、音楽関係のクラブ・サークルに所属していた。

b 前問aで「ニ」に○印を付けられた方は、そのサークルのジャンルを下の選択肢に○印を付けてお答え下さい。

1 合唱

2 オーケストラ

3 プラス・バンド、吹奏楽

4 マンドリン・オーケストラ、ギター・クラブなど

5 ジャズ、ロック、軽音楽などのポピュラー系

6 邦楽（ ）

7 その他（ ）

Q 9 aの集計結果と考察は既に行った。² Q 9 bの集計結果は表1-1, 2のとうりである。

表1-1【9 b】大学時代に所属していた音楽関係のクラブ・サークル (学級担任)

	男	女	不明	合計
合 唱	15	48	3	66
オーケストラ	4	7	1	12
ブラスバンド、吹奏楽	4	9	0	13
マンドリン・オーケストラギター・クラブなど	9	30	1	40
ジャズ、ロック、軽音楽などのポピュラー系	13	11	1	25
邦 楽	0	17	0	17
そ の 他	1	3	1	5

表1-2【9 b】大学時代に所属していた音楽関係のクラブ・サークル (音楽専科)

	男	女	合計
合 唱	3	5	8
オーケストラ	2	4	6
ブラスバンド、吹奏楽	0	2	2
マンドリン・オーケストラギター・クラブなど	0	1	1
ジャズ、ロック、軽音楽などのポピュラー系	1	4	5
邦 楽	0	0	0
そ の 他	0	0	0

集計総数は、複数回答であるためQ9aで「ニ」に○印を付けた人数(学級担任の、男37女113不明7、計157・音楽専科の、男5女15、計20)を若干上まわっている。

合唱団などの盛況ぶりからして、合唱に参加した人の数はかなり多いだろうと予想していたのでそれが裏付けられた結果であった。他に目を引いたのは、学級担任の集計結果での、マンドリン・オーケストラやギター・クラブに所属していた数で、予想をかなり上まわっており、反面、ジャズ・ロックをはじめとしたポピュラー音楽への参加数は予想をかなり下まわっていた。学級担任の女の先生方のうち17名が邦楽関係のクラブ・サークルに参加していた、という回答は幼少期のお稽古事との関連があるのかもしれない。これに対して、音楽専科で邦楽系統のクラブ・サークルへの参加者が皆無というのも注目される。

Q12からQ14までは、現在の音楽に対する関心、音楽も含めた諸文化やスポーツへの関心や興味
の度合などを知りたかったという意図による設問である。

Q12、音楽の各ジャンルに対しての個人的な好悪をお答え下さい。

	好き	どちらともいえない	嫌い
イ クラシック			
ロ 歌謡曲・演歌			
ハ 和製ポップス (フォーク・アイドル歌謡など)			
ニ 外国産ポップス (タンゴ・シャンソンなどを含む)			
ホ 映画音楽・ムードミュージック			
ヘ ジャズ・フュージョン			
ト ロック			
チ 邦楽			
リ 民族音楽			

イーリ以外で特に好きなの、嫌いなものがあればお書き下さい。

特に好き ()
特に嫌い ()

集計結果は表2-1, 2のとうりである。

表2-1【12】音楽の各ジャンルに対する個人的な好悪（学級担任）

		男		女		不明		全体	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
(イ) クラシック	好き	135	55.6	316	71.3	24	70.6	475	66.0
	どちらともいえない	102	42.0	123	27.8	9	26.5	234	32.5
	嫌い	6	2.4	4	0.9	1	2.9	11	1.5
	小計	243	100	443	100	34	100	720	100
(ロ) 歌謡曲・演歌	好き	120	48.6	176	39.8	13	38.2	309	42.7
	どちらともいえない	116	47.0	244	55.2	19	55.9	379	52.4
	嫌い	11	4.4	22	5.0	2	5.9	35	4.9
	小計	247	100	442	100	34	100	723	100
(ハ) 和製ポップス (フォーク・ アイドル歌謡 など)	好き	135	57.2	277	62.5	18	53.0	430	60.3
	どちらともいえない	91	38.6	156	35.2	13	38.2	260	36.5
	嫌い	10	4.2	10	2.3	3	8.8	23	3.2
	小計	236	100	443	100	34	100	713	100
(ニ) 外国産ポップ ス(タンゴ・ シャンソンな どを含む)	好き	79	33.3	185	41.9	11	32.4	275	38.6
	どちらともいえない	143	60.4	246	55.6	23	67.6	412	57.8
	嫌い	15	6.3	11	2.5	0	0	26	3.6
	小計	237	100	442	100	34	100	713	100
(ホ) 映画音楽 ムードミュー ジック	好き	142	61.5	331	74.9	25	75.8	498	70.5
	どちらともいえない	87	37.7	108	24.4	8	24.2	203	28.8
	嫌い	2	0.9	3	0.7	0	0	5	0.7
	小計	231	100	442	100	33	100	706	100

(へ) ジャズ・フュー ジョン	好き	71	30.0	128	29.0	10	30.3	209	29.3
	どちらともいえない	139	58.6	272	61.5	23	69.7	434	61.0
	嫌い	27	11.4	42	9.5	0	0	69	9.7
	小 計	237	100	442	100	33	100	712	100
(ト) ロック	好き	68	28.7	98	22.3	9	27.3	175	24.7
	どちらともいえない	116	48.9	269	61.3	20	60.6	405	57.1
	嫌い	53	22.4	72	16.4	4	12.1	129	18.2
	小 計	237	100	439	100	33	100	709	100
(チ) 邦 楽	好き	23	9.6	63	14.3	5	15.6	91	12.8
	どちらともいえない	162	68.1	324	73.5	23	71.9	509	71.6
	嫌い	53	22.3	54	12.2	4	12.5	111	15.6
	小 計	238	100	441	100	32	100	711	100
(リ) 民族音楽	好き	39	16.7	86	19.9	10	31.3	135	19.4
	どちらともいえない	158	67.5	314	72.7	21	65.6	493	70.6
	嫌い	37	15.8	32	7.4	1	3.1	70	10.0
	小 計	234	100	432	100	32	100	698	100

表2-2【12】音楽の各ジャンルに対する個人的な好悪（音楽専科）

		男		女		不明		全体	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
(イ) クラシック	好き	7	87.5	27	97.4			34	94.4
	どちらともいえない	1	12.5	1	3.6			2	5.6
	嫌い								
	小計	8	100	28	100			36	100
(ロ) 歌謡曲・演歌	好き	4	50.0	10	37.0			14	40.0
	どちらともいえない	4	50.0	14	51.9			18	51.4
	嫌い			3	11.1			3	8.6
	小計	8	100	27	100			35	100
(ハ) 和製ポップス (フォーク・ アイドル歌謡 など)	好き	4	50.0	12	33.3			16	44.4
	どちらともいえない	4	50.0	14	50.0			18	50.0
	嫌い			2	5.7			2	5.6
	小計	8	100	28	100			36	100
(ニ) 外国産ポップ ス(タンゴ・ シャンソンな どを含む)	好き	4	50.0	17	58.6			21	56.8
	どちらともいえない	4	50.0	11	37.9			15	40.5
	嫌い			1	3.5			1	2.7
	小計	8	100	29	100			37	100
(ホ) 映画音楽 ムードミュー ジック	好き	5	62.5	26	96.3			31	88.6
	どちらともいえない	2	25.0	1	3.7			3	8.6
	嫌い	1	12.5					1	2.8
	小計	8	100	27	100			35	100

(へ) ジャズ・フュー ジョン	好き	3	37.5	9	32.1			12	33.3
	どちらともいえない	4	50.0	17	60.7			21	58.3
	嫌い	1	12.5	2	7.2			3	8.4
	小 計	8	100	28	100			36	100
(ト) ロック	好き	1	12.5	9	32.1			10	27.8
	どちらともいえない	5	62.5	14	50.0			19	52.8
	嫌い	2	25.0	5	17.9			7	19.4
	小 計	8	100	28	100			36	100
(チ) 邦 楽	好き	2	25.0	6	21.4			8	22.2
	どちらともいえない	5	62.5	21	75.0			26	72.2
	嫌い	1	12.5	1	3.6			2	5.6
	小 計	8	100	28	100			36	100
(リ) 民族音楽	好き	2	25.0	7	25.0			9	25.0
	どちらともいえない	6	75.0	20	71.4			26	72.2
	嫌い			1	3.6			1	2.8
	小 計	8	100	28	100			36	100

この質問項目最後の「特に好き」、「特に嫌い」に対しては極く少数の回答があったが、イ〜リに含まれていないというのではなく、イ〜リのうちのいずれかのジャンルを形容詞付きであげたもの(例えば「耳にうるさいだけの・・・」、「自己陶酔的な・・・」など)であり、ほとんどがイ〜リに含まれるものと判断して集計からはずした。

ここでは、各項目に対しての回答数の総数に多少のパラつきが見られた。これは、一部になじみのないもの、知らないものがあつたために回答を留保したためと推察される。また、欄外に「どういうものを指すのかもっとはっきりして欲しい」というコメントを付したものがあつたが(一枚のみ)、回答内容から推すとほぼ的確にこちらのイメージを捉えていた。この項目の質問内容は「自分が聴いて楽しむ」、すなわち享受、と受け取られたようである。(これについては第一報でも触れておいた。)自分で演奏して楽しむ、という方はQ14の「趣味」で、と考えたわれわれの意図は正しく理解しても

らえたようである。

ここで目を引く集計結果は、クラシックの意外に高率な支持数値と、歌謡曲・演歌の支持数値の示した意外な不人気である。学級担任・音楽専科が共にきわめて高率で「好き」と回答しているのは映画音楽・ムードミュージックであるが、これは映画が国民各層にかなり見られている（映画館だけではなく）という事実を反映した数値であると言えよう。このような結果が出た背景や他の調査との比較は後段で行いたい。

Q 13、次のような施設、催し物などにはどの程度行かれますか。

	よく行く	たまに行く	ほとんど行かない
イ 展覧会・美術館など			
ロ 野外レクリエーション・ピクニックなど			
ハ 運動クラブ・サークルなど			
ニ カルチャー・センターなどの 文化的サークル			
ホ 音楽会・コンサート (ジャンルを問わず)			

注 よく行く……………月に1・2回以上

たまに行く……………年に数回程度

殆ど行かない……………年に0～1回以下

集計結果は表3-1, 2のとうりである。

表3-1【13】文化的・体育的な施設や催し物への参加（学級担任）

		男		女		不明		全 体	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
(イ) 展覧会・美術館 など	よく行く	36	15.0	74	16.3	3	8.8	113	15.5
	たまに行く	147	61.3	323	71.3	24	70.6	494	68.0
	ほとんど行かない	57	23.7	56	12.4	7	20.6	120	16.5
	小 計	240	100	453	100	34	100	727	100
(ロ) 野外レクリエー ション・ピクニ ックなど	よく行く	13	5.5	23	5.0	1	3.0	37	5.1
	たまに行く	109	45.8	221	48.5	20	58.8	350	48.1
	ほとんど行かない	116	48.7	212	46.5	13	38.2	341	46.8
	小 計	238	100	456	100	34	100	728	100
(ハ) 運動クラブ・ サークルなど	よく行く	55	22.9	49	10.9	5	14.7	109	15.1
	たまに行く	81	33.8	113	25.2	9	26.5	203	28.1
	ほとんど行かない	104	43.3	287	63.9	20	58.2	411	56.8
	小 計	240	100	449	100	34	100	723	100
(ニ) カルチャーセン ーなどの文化的 サークル	よく行く	8	3.4	25	5.6			33	4.6
	たまに行く	32	13.6	86	19.2	7	20.6	125	17.4
	ほとんど行かない	195	83.0	337	75.2	27	79.4	559	78.0
	小 計	235	100	448	100	34	100	717	100
(ホ) 音楽会・コンサ ート（ジャンル を問わず）	よく行く	12	5.0	30	6.7	3	8.8	45	6.2
	たまに行く	130	54.4	290	64.4	21	61.8	441	61.0
	ほとんど行かない	97	40.6	130	28.9	10	29.4	237	32.8
	小 計	239	100	450	100	34	100	723	100

注. よく行く……………月に1・2回以上
ほとんど行かない……年に0～1回以下

たまに行く……………年に数回程度

表3-2 【13】文化的・体育的な施設や催し物への参加（音楽専科）

		男		女		不明		全 体	
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
(イ) 展覧会・美術館 など	よく行く	1	12.5	5	17.9			6	16.7
	たまに行く	4	50.0	22	78.5			26	72.2
	ほとんど行かない	3	37.5	1	3.6			4	11.1
	小 計	8	100	28	100			36	100
(ロ) 野外レクリエー ション・ピクニ ックなど	よく行く								
	たまに行く	4	50.0	15	53.6			19	52.8
	ほとんど行かない	4	50.0	13	46.4			17	48.2
	小 計	8	100	28	100			36	100
(ハ) 運動クラブ・ サークルなど	よく行く			2	7.1			2	5.5
	たまに行く	3	37.5	12	42.9			15	41.7
	ほとんど行かない	5	62.5	14	50.0			19	52.8
	小 計	8	100	28	100			36	100
(ニ) カルチャーセン ーなどの文化的 サークル	よく行く	1	12.5	1	3.6			2	5.6
	たまに行く	3	37.5	9	32.1			12	33.3
	ほとんど行かない	4	50.0	18	64.3			22	61.1
	小 計	8	100	28	100			36	100
(ホ) 音楽会・コンサ ート（ジャンル を問わず）	よく行く	1	12.5	7	25.0			8	22.2
	たまに行く	6	75.0	20	71.4			26	72.2
	ほとんど行かない	1	12.5	1	3.6			2	5.6
	小 計	8	100	28	100			36	100

注. よく行く……………月に1・2回以上

たまに行く……………年に数回程度

ほとんど行かない……………年に0～1回以下

ここでも項目によって回答数に多少のバラつきが見られた。

参加率が比較的高かった項目を拾ってみると、学級担任ではイ) 展覧会・美術館などとハ) 運動クラブ・サークルなどへの参加（共に約15%）が、音楽専科ではイ) 展覧会・美術館など（約17%）、ホ) 音楽会・コンサート（約22%）である。

イ) 展覧会・美術館など、とホ) 音楽会・コンサートという2項目では「殆ど行かない」の回答率が他の項目のそれより低いが、ロ) 野外活動など、ハ) 運動クラブなど、ニ) カルチャー・センターなどへの「ほとんど行かない」の回答率はかなり高く、ロ)、ハ)、ニ) のような施設・催し物などへ足を運ぶ機会がほとんどない先生がかなり多いことを示している。この理由などについては後段で検討したい。

Q14、何らかの形で音楽を趣味にされていますか。

イ している。 種目 ()

ロ していない。

Q14のイ) 及びロ) の集計数値は第一報に集計済みである。² ここではイ) の種目について集計を行った。集計結果は表4-1, 2のとうりである。

表4-1【14】音楽を趣味にしている場合
の音楽の種目 (学級担任)

	男	女	不明	合計
鑑賞	49	88	9	146
カラオケ	5	8	0	13
合唱	10	10	0	20
ピアノ	7	64	1	72
オーケストラ	2	1	0	3
ブラスバンド・吹奏楽	5	6	1	12
邦楽	3	10	0	13
その他	41	46	4	91

表4-2【14】音楽を趣味にしている場合
の音楽の種目 (音楽専科)

	男	女	不明	合計
鑑賞	0	11		11
カラオケ	0	0		0
合唱	2	2		4
ピアノ	0	9		9
オーケストラ	0	0		0
ブラスバンド・吹奏楽	0	0		0
邦楽	0	0		0
その他	2	4		6

ここでは選択肢方式にせず、記述回答方式をとったので集計項目の設定についてはQ9bの項目を基に現在の音楽状況を配慮して決定した。一人の人がいくつかの種目をあげている、種目を記入していない、などの理由でこの回答数とQ14のイ)の回答数は一致していない。

音楽鑑賞を趣味にしている、という回答はQ12の様子から推して多いだろうと思っていたので、ほぼ予想していたとうりと言える。意外に多いと思われたのはピアノで、予想に反して少なかったのはカラオケであった。なお、その他のなかで多かったのはエレクトーンをはじめとする電子鍵盤楽器、ギター、各種管楽器などであった。この結果から読み取れる社会背景などについては後段で触れる。

後段ではこれらの集計結果に基づき、結果を生んだ原因と考えられる諸要素、社会的な背景、他の調査との比較、現在の教育状況の分析などを行う。

まず、Q 9 bの集計結果であるが、学級担任のうち約20%の人が大学在学中に何らかの音楽活動を体験している。² この数値は我々が漠然と予想していた数値よりはかなり高いものであった。

前述のように、学級担任・音楽専科とも合唱が第1位であるがその後はかなりの違いを見せ、学級担任ではマンドリン・オーケストラ、ギター・クラブ、ポピュラー系、邦楽という順序、音楽専科ではオーケストラ、ポピュラー系と続いている。これも前述のように予想外に少なかったのがポピュラー系統の音楽活動をしていた人数で、これは次のQ 12のト) ロックが嫌い、と回答した数値が意外に高かったことと符合している。邦楽系のクラブ・サークル活動をした経験を持っているのは女性の学級担任の先生ばかり、というのも目を引いた。幼少時に始めたお稽古事がたまたま邦楽系でそれが中断されずにこの年代まで続けられた、ということかもしれない。そうだとすれば、洋楽中心で育てられた人が多いと推察される音楽専科の方に邦楽系皆無、というのもうなづける。

Q 14のイ)の集計結果は、Q 9 bの集計結果とならべて見ることによって、だいたいいろいろな視点を提供してくれるので、こちらをQ 12、Q 13の集計結果の考察の前に取り上げることにする。

まず「趣味にしている」との答えは学級担任で54.1%、音楽専科で70.3%であって、ともにQ 9 a「二」への○印の割合、学級担任の21.2%、音楽専科の54.1%よりかなり高い。これはQ 9 bのほとんどが自分で何か演奏することをその内容としていたのに対して、Q 14のイ)は自分は演奏しないが、音楽を聴いて楽しもう、という考え方があるからであろう。

そのことを反映して趣味の第1位は、学級担任、音楽専科ともに鑑賞であった。これは音楽がさまざまなレベルでの享受が可能であり、そのための特別な訓練が無くとも鑑賞することが可能なこと、耳だけでも聴取が可能なので機械的な作業なら同時に行うことが可能なこと、近年のオーディオ機器や音楽ソフトの低価格化による普及などによって自分の好きな時、好きな場所で楽しむことが可能になったこと、などが考えられる。特に、若い先生方にとってはウォークマンをはじめとするヘッドフォン・ステレオはもはや必需品の部類に入っているのではないだろうか。

第2位はピアノ。これは当然鑑賞ではなく演奏と考えられるので、正直に言えば予想外の高い数値であった。これにその他の中に集計したエレクトーンをはじめとする電子鍵盤楽器、他の楽器演奏を合わせれば、自分一人で、または極く少人数で演奏することを楽しんでいる人はかなりの数になろう。やはり自分の好きな時、気が向いた時にやれる、というメリットは高いと思われる。Q 11の集計²を見るとチェルニー30番練習曲やソナチネ・アルバム以上のものを弾くことのできる人が、学級担任でも約25%いることを考え併せれば納得できる。

意外に少なかったのはカラオケで、これは後ほど述べるQ 12、ロ) 歌謡曲・演歌が「好き」と回答した人の数値の低さと同じ原因かもしれない。

Q 9 bへ○印を付けたうちの何名かは当然「鑑賞」及び「ピアノ・電子鍵盤楽器」と答えているだろうし、「その他」に集計した数そのものがかなり多いので、このデータからでは推測の域を出るものではないが、大学時代に何らかの充実した音楽体験を味わった人は、その体験の思い出もあってできればずっと音楽と関わりたいと思い音楽を趣味として続けようとする、というようなことが考えられないだろうか。これを確かめるためにはもちろんQ 9 bとQ 14のイ)とを関連させての集計が必要

であるが、これからの生涯教育と関わっての仮説として提出しておきたい。

Q12の集計結果ではいくつか興味深い傾向が見られた。この質問は「聴取」、「享受」と特に断わったわけではないが回答内容は回答者全員がそのように受け取ったことを示している。また、音楽に対しての自らの働きかけという面でこのQ12の回答をみると、音楽専科はほとんどの項目で学級担任よりは「好き」の割合が高く、積極的に音楽を受け入れようという積極性や音楽に対する関心が高いと言えよう。

音楽専科の「クラシック・好き」の94.4%は例外的にしても学級担任の「クラシック・好き」の66.0%はかなり高率と言えるし、映画音楽・ムードミュージックが青春時代の思い出も重なって人気が高いのは当然とうなづけるが、歌謡曲・演歌の不人気は少々意外であった。NHK放送世論調査所が昭和56年10月に行った調査「現代人と音楽」⁶によると、調査対象者のうちで歌謡曲が65.9%、演歌も50.6%の支持率を得ている。しかも演歌は児童生徒学生、といった若い世代が10%という低い支持数値を示しているのでそれに引っ張られてという原因が考えられるので、それよりも高年齢層の支持数値は当然もっと高い。この調査では残念ながら職業別として「教員」という項目は設定していない（事務・技術職の中に入れて集計してある）ので、日本全体の教員から見ての山口県の教員の傾向を断定することはできないが、興味を引くデータである。

同調査の分析によると学歴・職業の違いによって、聴かれる音楽の好みに明らかな差が出ているとのことなので、これを考え併せると、高学歴・専門職型・教養人的な音楽の聴き方に近いと言えよう。

このことは「ト）ロック・好き」と積極的に肯定にまわった人があまり多くなかったという集計結果とも同一の傾向を示している。欧米でのロックンロール・ミュージックは主として反体制傾向の強い若者や大衆によって支持を得ている音楽という強いイメージで見られている。また、今回の調査対象者の年齢層分布と見比べると、かつ高年齢層のロック・ミュージックの支持率が低いということを見ると、この結果も納得できよう。

「ハ）和製ポップス」と「ニ）外国産ポップス」の支持傾向が、学級担任と音楽専科でほぼ入れ替わりになっているのも興味深い。音楽専科教員全体が洋楽志向になっていると言うわけではないだろうが、こういうところにも感覚の違いというのが表れているように思われる。

Q13の集計結果は、現在の教員の置かれた状況を数値的に裏付けているように思われる。

この質問は文化的・体育的な施設や催し物などへ、どの位足を運ぶ機会があるのかによってその精神生活上の興味や関心がどのあたりにあるのかを把握することがはじめの意図であった。しかし、この集計結果に見られる数値はそれとはかなり違った面から現在の教員の置かれた状況を示すことになったようである。

一言で言えば教員は多忙なのである。「殆ど行かない」は実際には「殆ど行けない」、「行きたい気持ちはあるが行く時間もとれない」と読むべきであろう。小学校の学級担任は原則的には総ての教科を教えなくてはならない。そのための教材の準備や自分自身の勉強に確保せねばならない時間は決して

少なくないだろうし、行事や子供達・父母との対応も重要な仕事の一部である。また、結婚し家庭を持っている場合、特に女性の先生は主婦としての仕事もかかえてということになれば、時間が無くなるのも当然であろう。

美術展などのうち会期を長めにとっているものなどは、その期間内のどこかで時間をやりくりすることができるので、年に数回程度は行くことが可能というように考えられるが、音楽会・コンサートなどはたいがい一回限り、開催されるその日その時に合わせて足を運べる状況にしなければならない。突発的な学校事故の発生の可能性や行事の多さ、県内でのこの種の催し物の数などを考え合わせると、学級担任も音楽専科も忙しいなかでよく頑張ってその種の催し物に足を運んでいると言えよう。

運動クラブに通っている人が学級担任の男性に多いというデータは、若手教員の発散場所とも、全年代的に健康管理の一手段とも考えられるが、推察の域を出るものではない。カルチャー・センターなどは都市部でやっと本格的な設立、活動が始まったばかりなので、今まで行く機会そのものが乏しかったということであろう。

本章の最後に、今回の集計結果を基に、前回第一報の集計結果も一部参照しながら現在の小学校教員の置かれた状況を考えてみよう。

現在の公立学校の教員、特に若手はたいがい高学歴であり、多感な青年時代までの精神活動も決して低いレベルにとどまるものではなかったように思われるし、現在でも向上の意志は強い。これはQ9b、10、11、12、14などの集計結果によってある程度推察されるし、自由記述の部分の内容もその傾向を示している。しかし、一方であまりの多忙さでそのような欲求を実現できないでいるというように考えられる。

このように考察してみると、第I章で指摘したような「好ましくない状況」の原因を図式化して示すことが可能であろう。すなわち、

学校現場における慢性的多忙状態

- 向上の機会の阻害、喪失による諦め
- 無気力な授業態度
- 無感動な授業の出現

このような状態を少しでも解消していくために、教育学部でどのような教員養成のカリキュラムを書くのか、音楽はそのなかでどのような位置を占めるのか、それに応えるためにどのような教育プランを持つのか、これが今後のわれわれの課題である。

V おわりに

本稿では、山口県内の小学校の教員を対象にしたアンケート調査のうち四つの質問項目（大学時代に所属していた音楽関係のクラブ・サークル、教員の各ジャンルの音楽に対する好悪、芸術文化・体

育等の行事・催し物への関わり、音楽を趣味にしている場合の音楽の種類)の調査結果をもとに、特に教員の音楽に対する意識や音楽・文化一般との関わりについて考察した。先ず、前段で質問項目ごとに集計結果の数値をながめて若干の考察を加えた。次に、後段では、これらの集計結果に基づき、結果を生んだ原因と考えられる諸要素、社会的な背景、他の調査との比較、現在の教育状況の分析等を行った。

最終的に本調査研究全体の考察から、音楽教育に関わらせて小学校の教員像を大まかに描いてみると次のようになる。

精神的な面での充実や向上を図りたいと思っはいるが、家庭での事情や学校での多忙さから思うにまかせないというのが現状ではないか。結局、多忙さ→向上への障害→無気力→無感動という図式が浮かび上がってくる。

本稿は、「小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討と開発」のための資料を得るために行った調査研究の報告の一端であるが、本調査研究全体を通じて得た資料を考慮に入れながら今後小学校教員養成課程における音楽科のカリキュラムの検討と開発に取り組みたいと考えている。

謝 辞

今回の調査を実施するに当たって、全面的にご協力いただいた山口県小学校教育研究会音楽部会(会長原 祥文)及び調査対象になっていただいた先生方に対して厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 梅本堯夫他, (1971);「メロデー感の発達研究—遊び場面における子どもの歌の分析—」音楽教育研究 No.62 p.20
- 2) 山口大学教育学部音楽科, (1989);「小学校の音楽教育の実態に関する調査研究(I)—山口県内の小学校教員を対象に—」山口大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要第1号 pp.101-141
- 3) 千成俊夫, (1981);「音楽科教員に求められる資質」季刊音楽教育研究 29 pp.80-87
- 4) 広瀬鐵雄, (1977);「西ドイツの学校音楽に関する諸問題」音楽教育学 第7号 pp.36-47
- 5) 三好清美, (1989);「小学校音楽の授業のあり方—共同体としてのクラスを生かして—」昭和63年度山口大学教育学部幼稚園課程卒業論文
- 6) NHK放送世論調査所編, (1982);「現代人と音楽」日本放送出版協会 pp.67-90

教育学部音楽科における教育内容検討の
ための基礎調査

Q 1、先生御自身についてうかがいます。
(男・女) (20代・30代・40代・50代以上)
今年度の所属についてうかがいます。

1 学級担任()学年

2 専科、教科()

音楽専科の先生方についてうかがいます。

出身大学は次のどれでしょうか。

イ 教育学部・教育大学系

ロ 音楽学部・音楽大学系

ハ 音楽大学などの教育学科

ニ その他()

小学校における授業についてうかがいます。

Q 2、現在、音楽の授業を担当しておりますか。

イ 自分のクラスを担当している。

ロ 自分のクラスと他のクラスを担当している。

ハ 専科教員として担当している。

ニ 担当していない。

Q 3、前問 Q 2 で、「イ(自分のクラス)」、「ロ(自分のクラスと他のクラス)」と答えられた先生方についてうかがいます。音楽の授業を担当することについてどのような感じを持たれていますか。

イ 喜んで(楽しんで)担当している。

ロ いやいやながら(仕方なく)担当している。

ハ 特に何とも思わない。

ニ その他()

選ばれた理由について簡潔にお書き下さい。

Q 4、前問 Q 2 で、「ニ(担当していない)」と答えられた先生方についてうかがいます。

a 担当していない理由をお答え下さい。

イ 音楽専科の先生にお願ひできるので。

ロ 音楽の授業ができないから。

ハ 他の教科()の専科教員だから。

b 今年度以外についてうかがいます。

音楽の授業を担当されたことがありますか。

イ ある

ロ ない

c 前問 b で、「イ(ある)」と答えられた先生方についてうかがいます。音楽の授業を担当された時の感想をお聞かせ下さい。

イ 喜んで(楽しんで)担当していた。

ロ いやいやながら(仕方なく)担当していた。

ハ 特に何とも思わなかった

ニ その他

選ばれた理由について簡潔にお書き下さい。

すべての先生方についてうかがいます。

Q 5、小学校における教科としての音楽科の重要度について、どのような感じを持たれていますか。低・中・高学年のそれぞれについてお答え下さい。

非常に重要 重要 少しは重要 重要でない

低学年

中学年

高学年

--	--	--	--

Q 6、小学校音楽科の授業はどのような点に重きを置くべきだとお考えになりますか。

() イ 発声法・楽器の演奏法などの技術習得。

() ロ 音楽をすることによる明るく楽しい学級作り。

() ハ 音楽についての知識を広めさせ、理解を深めさせること。

() ニ 歌・楽器演奏など、上達しようとして一生懸命頑張る気持ちを育てること。

Q 1 3、 次のような施設、 備し物などにはどの程度行かれますか。

よく行く たまに行く 殆ど行かない

- イ 展覧会・美術館など
ロ 野外レクリエーション・ピクニックなど
h 運動クラブ・サークルなど
ニ カルチャー・センターなどの
文 化的サークル
* 音楽会・コンサート
（ジャンルを問わず）

注 よく行く - - 月に 1・2 回以上
たまに行く - - 年に 数回程度
殆ど行かない - - 年に 0 - 1 回以下

Q 1 4、 何らかの形で音楽を趣味にされていますか。

- イ している。 種目 ()
ロ していない。

Q 1 5、 小学校音楽科の授業をするにあたり、 どのような課題・悩みをお持ちですか。 自由にお書き下さい。 (簡潔にお答え下さい。)

--

ご協力ありがとうございました。